

『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注
—第五誡「人を殺すべからず」に関わる9つの告解—

Tradução integral portuguesa dos *MODVS CONFITENDI et EXAMINANDI* (Roma, 1632) da autoria de frei dominicano Diego Colhado: Confissões dos pecados dos crentes japoneses seiscentistas contra o quinto mandamento de Moisés

日 埜 博 司

2004年度リスボアにおける在外研修中、いろいろな方々の暖かい協力と指導とに浴し、ドミニコ会宣教師ディエゴ・コリヤードの著書『懺悔録』(1632年、ローマ刊)に収められた日本語テキスト全文へポルトガル語の訳注を施すという作業をひとまず終えることができた。この間の経緯については、『流通経済大学社会学部論叢』通巻第30号(2005年)所収の拙稿「コリヤード『さんげろく』葡語訳注雑感——在外研修余滴として」に記述した。前記葡語訳注はしかるべき準備期間を経、リスボアもしくはマカオで上梓したいと思う。

『流通経済大学論集』通巻第148号(2005年)所収の拙稿「『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第六誡「邪淫を犯すべからず」に関わる15の告解」に引き続き、本誌には、『コリヤード 懺悔録』の中からいわゆるモーセの十誡中第五誡「人を殺すべからず」に関する9つの告解を掲載する。

解題の一部として、『コリヤード 懺悔録』の authorship に関わる若干の問題を、『サルヴァトル・ムンヂ』という書物と『コリヤード 懺悔録』との間に想定される関連性と絡めつつ、少し記述しておく。

『コリヤード 懺悔録』を最も早い時期に紹介したのは新村出であろう。新村は、1910(明治43)年に発表した初出誌不明のエッセイ「吉利支丹版四種」において「此『懺悔録』は西洋の図書館には珍しくないのみならず、今は我国にも伝はつてをる。殊に1866年バジェー〔引用者注——レオン・バジェスのこと。『日葡辞書』をフランス語に訳した『日仏辞書』の編者〕が巴里で翻刻した本もあるから知つてをられる人々も少なくあるまい」と記

している¹。『懺悔録』に収められる日本人キリシタンの告解はラテン文字の日本語で印刷されているとはいえ、これを解読し十全に利用するには、17世紀日本語に関する造詣のみならずキリシタン教理に対する深い知識が不可欠であった。新村の紹介以後、『懺悔録』の翻字文は数点現われるけれども、信頼できるものとしては、姉崎正治「キリシタンの懺悔告白」²を待たねばならなかった。

書	文	道	傳	570
<p>concipere.</p> <p>その外、容貌のよい女を見る度毎に、悪念が起つて、惣別あれ科な！とのぞめども、時に依つては、その妄念を拂うて防ぎまらする。同心したの数は覺えまらせぬ。しかも女の體と進退は眼にかゝり次第でござる。</p> <p>或時も、俄に、人ない處で一人女につき合うて、……</p> <p>答。我等、不犯の願の者でござるを、キリシタン衆皆知られて、縁邊の沙汰少しもござらうで、邪の念が萌す時は、身を攝してなりとも防ぐこともあり、sed aliquando quando nimis et fortiter ab humiliori veror: perseverare in resistendo non valens succumbo praedictis tentationibus: unde quater quinquies vel sexies memetipsum varijs modis provocabi ad delectationes venereas varijs mutationibus et tactibus usque ad desiderij completionem.</p> <p>又、身が願の障礙を知られた男、…… =</p> <p>又、わらわ、男より容貌のよう美しい女と譽めらるゝ時は、勇み喜び、又氣に合ひよい男とつき合ひの時分に依つても、眞實からねたかつたことも三度ござり、同心せいで、只うわそらにそう申したことも節々でござつた。</p> <p>その上、我が夏の暑さで、……</p> <p>ま一度は、丁度、前の如くに、同じ者が來て =</p> <p>私が童で二親を失うて、孤になりまらした。そうあつたれば、世を過ぐる様がござらいで、</p>				
= [42]	= [40]	<p>a 思へど</p> <p>b 不淫の誓を立てた。</p> <p>c ラテン譯では「肉體を苦めて」。</p>		

姉崎正治による『コリヤード 懺悔録』翻字

『姉崎正治著作集 第四卷 切支丹迫害史中の人物事蹟』(国書刊行会、1976年、原本1930年刊)より。おびたしい伏せ字のため通読ができない

¹ 『新村出全集』第五卷、筑摩書房、1971年、178ページ。

² 『姉崎正治著作集 第四卷 切支丹迫害史中の人物事蹟』(国書刊行会、1976年、原本1930年刊)所収。

姉崎はコリヤードの書物を「当時の風俗言語に関する珍重の資料であり、又キリシタン伝道の実情や信徒の心情を語る絶好の材料である」と評価し、簡単な脚注を伴う翻字文を公にした。大塚光信は岩波文庫版の『コリヤード 懺悔録』校注本で、姉崎の業績を指して「全文の翻字文」と述べているけれど、国書刊行会から1976年に復刻された姉崎の前掲書を覗いてみて驚くのは、性倫理をめぐる第六誠の翻刻に見えるおびただしい省略である。「きはどい」と彼が判断したくだりには、対応するコリヤードのラテン語訳をそのまま挿入してある(!)にすぎなかったり、翻字を回避して伏せ字にしてあったりする。これについて姉崎はこう記す。「風俗史の上から見れば、材料として大切な事柄でも、伝道史の見地からはそれほどでない分を削除し、その他で比較的無害な事でも、風俗の上に面白からぬ点は、ラテン訳だけを出すことにしたのである」と。

せっかくの労作もこれでは意義を失うではないかと声を大にして言いたいのが、「学際」という概念に乏しかった当時のこと、やむを得ないのであろう。それに加えて、満州事変前夜の日本にあっては、「身を掻き探り、あの方に指を挿し入れ」だの、「男と互ひに恥を持たせて、漏らし漏らすことも日ごとにある」だのという表現は、たとえ歴史的文書に記されるものであっても、官憲による検閲もしくは著者による自主規制の対象であつたらしいのだ。姉崎の施した伏せ字によってそのことが推測できるのは、興味深い。現在の「高み」から、種々の制約に囚われた過去をからかったりあげつらったりするのは卑怯な振る舞いであるから、姉崎のこの箇所の翻字に関してはこれ以上の論及を避ける。

姉崎の翻字には現今の研究段階からすると訂正されるべきものが含まれるとはいえ、それを収載した論文が『懺悔録』研究史上の嚆矢であり基礎であるという事実は動かない。

さて姉崎は、この翻字文に添えた解説の中で、コリヤードが本当に『懺悔録』の著者(Auctor)と名乗りうるのかどうかという疑念を表明し、「他人の材料を怪しげながらに出版したものだと推定し得ることゝ思ふ」と記した。さらに『コリヤード 懺悔録』に収められた告白は内容的観点から、「慶長の前半又は後半、上方に於ける材料と、元和年間九州に於ける材料とを含むであて、恐らくゼズ会〔イエズス会〕の教師等の中で出来たものであらう」と述べた。つまり、イエズス会士の手になるであろう先行資料をコリヤードが無断で利用した、少なくとも、イエズス会士の作成した資料に依拠しそれを敷衍したしろものを断わりもなしに自著と称したのではないか、という疑惑を投げかけたのである。

これに対する否定的見解ないしは反論であるが、大塚光信が臨川書店刊『コリヤードさんげろく私注』(1985年)ならびに岩波文庫本『コリヤード 懺悔録』(1986年)それぞれの解説において行なっているのも、ここでそれらを逐一再録することは避ける。

『懺悔録』に収められた懺悔のかずかずがイエズス会宣教師の作成した資料から採取されたものなのではないかという姉崎の疑念を踏まえつつ、さらに一歩進んだ考察を示したのは助野健太郎であった。助野の推定によると、日本イエズス会版『サルヴァトル・ムンヂ』に対応して編まれたイエズス会側の懺悔文例集が往時存在し(ただしそのようなものが実在したという証拠はない)、それが『コリヤード 懺悔録』の「元本」になっていたの

ではないかという³。

『サルヴァトル・ムンヂ』はローマのカサナテンセ図書館が所蔵する天下の孤本である⁴。1598年に出版されたが、刊行地は長崎であろうと思われるだけで未詳。いわゆるモーセの十誡や七つの大罪に関し、かくかくしかじかの科を犯したことありや否や、という尋問文が箇条書きで列举され、信徒はそれに応えみずからがどのような告解を行なうべきなのか、具体的に判断できるよう編まれている。ただ実際は、キリシタンに懺悔を促すためのマニュアルとして日本イエズス会の聴罪司祭が適宜用いたという公算が高いと思われる。流麗な行草体の漢字かな交じりの日本文字で印刷してある。

『サルヴァトル・ムンヂ』に見える聴罪司祭の問い掛けに、『懺悔録』に見える信徒の告解がよく対応しているという助野の指摘どおり、双方が鮮やかに照応している事例は確かに少なからず存在するようである（ただし全篇にわたる完璧な照応関係が双方間に成立しているわけでは決してない）。たとえば「身上に、悪事・災難出来し、或は心に任せざる事ある時、デウスを恨み奉り、或は万事を治め計らひ給ふ事なきかと疑ひたりや」（身の上に不幸や災難が出来したり、思うようにゆかぬ物事があつたりするとき、デウスを恨み奉ったり、デウスが万事を治め計らい給うことなどあり得ぬのではないかと疑念を抱いたことがあるか）という司祭の問い掛けに対し、『懺悔録』には、単なる偶然とは思えぬほどの照応を示す告解が見える。すなわち、第一誡「御一体のデウスを敬ひ、貴み奉るべし」（『ドチリナ・キリシタン』）に関わる懺悔のひとつがそれで、厳しい迫害のもと、地獄に墜ちるべきゼンチョ（異教徒）が安楽な生活を送っているのに、永遠の至福を約束されているはずの我らキリシタンが現世ではなぜこうも惨憺たる苦難にばかり遭うのであろう。デウスのなさりようはまるで「逆様」ではないかと恨み、これに対し少し腹立ちを覚えた、というのである。

今も鮮明に記憶しているが、2004年度在外研修期間中のリスボアにおける私の共同研究者ルシオ・デ・ソウザは、この懺悔は優れて非ヨーロッパ的というか、とにかくカトリック的通念からは際立って異様に映る。原文には本当に唯一絶対のデウスへ「腹立ちを覚えた」と書いてあるのか、と私に念を押した。問題の懺悔の全文を示す。

また、近所の無キリシタンの上の事どもも、皆その身の望みのままになるを見、ま

³ 「コリヤードとその懺悔録」『基督教史学』第5輯別冊、基督教史学会、1954年。

⁴ 扉表には *SALVATOR MVNDI*（『地上の救い主』）とあり、通常これが書名として慣用されているが、扉裏には *CONFESSIONARIVM // IN COLLEGIO IAPPO- // NICO SOCIETATIS. // IESV. // Cum facultate Superiorum // ANNO. M.D.XCVIII* とあり、この *CONFESSIONARIVM*（『告解書』）が書物の実際の内容を示している。雄松堂書店が1978年に海老沢有道の解説を附し「南欧所在 吉利支丹版集録」の一冊として影印本を刊行している。松岡洸司による全文翻刻・総索引があるほか（『慶長三年耶蘇会版 サルバトル・ムンヂの本文と索引』『上智大学国文論集』6、1973年）、大塚光信は十誡と七大罪に関わる箇所のみの翻刻を岩波文庫版『コリヤード 懺悔録』（1986年）に「参考」として掲げている。ただし双方の翻刻の間には微妙な異同がある。

たこの世界の事について、善いキリシタン衆の散々の体を思ひ量る時は、デウス・インヘルノの苦患を受けうずる果報拙いゼンチョどもには、御慈悲の上より今の少しの快樂を遂げさせられて、後生の果てしない無事・安樂を受けさせられうずるキリシタン達には、下界にただ難儀・辛勞ばかり宛てさせらるること、真にデウスの不可思議なる御憲法・御憐れみでござると申すもござる。一度も二度もデウスに対して恨み、述懐仕って、さても逆様のデウスの御計らひかな！と存じて、デウスと少し叱りまらした。これは心根からでござなかつたれども、無信心、敬ひ無くして、デウスの堆い御事をばとり扱うたことは、身が誤りでござる。

下線を施した箇所の「叱る」(Xicarú)という動詞は現在とは意味が異なり、「腹を立てる」という意味であったことが『日葡辞書』から判明する。このことは前掲「コリヤード『さんげろく』葡語訳注雑感——在外研修余滴として」ですでに述べたし、第一誠に関する懺悔のポルトガル語訳注を一举掲載する際にも、改めてふれるであろう。

コリヤードがイエズス会の編纂物である『サルヴァトル・ムンヂ』をいわば下敷きにしたのではないかという助野健太郎の推測に対し、大塚光信は岩波文庫版の解説で次のように反論した。すなわち「悪にけがれたる所をきよむる」(『サルヴァトル・ムンヂ』)コンヒサン——告解——は、どんな危険を冒しても聴きに赴き、それに対する誠告を垂れねばならぬものである。『懺悔録』を編纂するにあたり、コリヤードが「そのような重大なことの典拠をすべてイエズス会のものに仰ぐであろうか」。そして何より、カトリックの秘蹟である「告解」それ自体は、その性質からしてどこの修道会でも内容的には酷似していて当然である」と。まずは、そのとおりであろう。そして次のような結論を下す。「たとえイエズス会のものに粉本があつたとしても、そしてまたコリヤード自身の手になるものでないとしても、コリヤードを頂点とする日本ドミニコ会の著述であるとするのに積極的に支障となるようなものはないと思われる」と。

以下は、上記のことを踏まえた卑見であるが、現時点では、『懺悔録』に見える告解のかずかずは次のように分類しうると考えておくのが穏当ではないであろうか。①コリヤードが実際にその耳で聴いたもの(これはコリヤードがもっぱら滞在した長崎およびその近郊在住の信徒のものでなければならない)。②ドミニコ会の同僚から教えられたもの(ドミニコ会は京坂にも教会を有し、コリヤードはある時期管区長代理の要職にあつたから、直接聴取したものでなくとも、コリヤードが同僚から畿内在住信徒の告解を伝え聞いたという可能性は排除できない、と大塚光信は主張する)。③イエズス会版『サルヴァトル・ムンヂ』を下敷きにしつつコリヤードがそのオリジナリティーをもって創作したもの(「創作」といっても、コリヤードがでたらめなサンゲの羅列に終始していると言いたいわけではない。すでにポルトガル語訳注ともども全篇紹介した第六誠に関する懺悔など、コリヤードその人による創作的編集の手が加わって

いるにせよ、細部にわたる文献的裏づけと絵解きによる検証とに堪えうる極上の性風俗誌であることは紛れもなく、しかも現実から遊離しているという印象が少しもない。

上記のようにして集録したり創作したりした懺悔のかずかずがコリヤードその人だけの努力によるものではなくとも、それらを破綻の少ない、自然で、よく練られた日本語の会話文に手堅くまとめた功績はコリヤードへ帰して差し支えないと思うし、懺悔のひとつひとつに附されたラテン語訳が大変りっぱな出来栄であると評価される（2004年度在外研修期間中における私の共同研究者のひとりルイ・マヌエル・ゴンサルヴェス〔西洋古典学〕の評）ことも、『懺悔録』の authorship を考慮するに際しコリヤードその人を有利にする一要因となりうると私は考える。

さらに附言するならば、コリヤードがたとえば『サルヴァトル・ムンヂ』を下敷きにしつつ『懺悔録』を編んだとしても、つまり、姉崎が非難するように、「材料の蒐集については何の明す所もな」く、「他人の集めた材料を我物顔に、自ら Auctor と名乗」ったとしても、その行為は当時、どこまで「编者として不公明の態度」と考えられていたのであろうか。明白かつ露骨な剽窃は論外として、古代・中世以来のヨーロッパ世界においては、先行著述のエッセンスを巧みな引用と十分な咀嚼とによってさりげなく自著に包摂し、他人の業績を特段の断わりなく己が作品のいわば“肥やし”にする行為は、伝統的な著述倫理の枠内で相当程度まで許容されていたのではないであろうか。私はこの問題に関して手堅い議論をする資格を持たないので、不用意な深入りは避けることにするけれど、いずれにせよ、少なくとも『コリヤード 懺悔録』は、「他人の材料を怪しげながらに出版したものだ」と推定し得ることゝ思ふ」という、ほとんど言いがかりに近いような難癖をつけられるべきしろものでないことだけは確かであろうと思う。コリヤードを『懺悔録』の純然たる「著者」Auctor と認めることには見解の相違を認めるとしても、この著述を偽書呼ばわりするには、それを立証するだけのさらに決定的な傍証――たとえば、『サルヴァトル・ムンヂ』に対応して編まれたイエズス会側の懺悔文例集のごときものが発見され、コリヤードの明白な“剽窃”行為が立証されるというような――が必要であろう。

参考までに、『サルヴァトル・ムンヂ』に見える第五誡に関する問い掛けの条々を掲載し、『懺悔録』に見える告解のひとつひとつとの照応ないし是非照応ぶりを検討するための便宜とする（適宜句読点を補い、キリシタン用語がそのままポルトガル語で用いられている場合はこれをカタカタに直す。読みやすさを考え、適宜ひらかなをルビの形で漢字に開き原文には見えない送りかなを送る等の措置を施す）。第五誡は、『ドチリナ・キリシタン』では「人を殺すべからず」となっているけれども、『サルヴァトル・ムンヂ』では「人を害すべからず」である。「人を害すべからず」には、物理的に人命を奪うという意味を超える、カトリック倫理的な意味合いも含まれているであろう。

第五のマダメント

- 一、非道に人を^(害)がいしたる事ありや。
- 二、けんくはをし、打擲に^(喧嘩)んじやうし、又は此等の悪事に合力したる事ありや。
- 三、他人に恥辱をしかけ、又はめんぼくを失なはするなどの悪口を^(言)いひたる事ありや。
- 四、人と中を^(違)たがひ、物を^(言)いはず、或は深きい^(違恨)こんを^(含)ふくみたる事ありや。
- 五、他人の上に悪事出来せん事を^(願)ねがひ、或は真実よりの^(呪)ろひたる事ありや。
- 六、人にモルタル科を^(勸)すめ、或は其科に合力したる事ありや。それといつば非道のな^(媒)か^(類)だちとなるたぐひ也。
- 七、他人にい^(違恨)こんを^(含)ふくませ、たがひに深く中を^(違)たがはせたる事ありや。
- 八、さいしけんぞくの科を^(義)いましむる事叶ひながら、いましめ留めざりし事ありや。
- 九、力だめしに死人を^(斬)きりたる事ありや。
- 十、女人に子をお^(随)ろさせ、又は其為にい^(異見)けんを^(加)くはへ、或は薬を^(加)与へたる事ありや。
- 十一、女人ならば、子をお^(随)ろしたる事ありやを申べし。
- 十二、同くうみ出してより害したる事ありや。
- 十三、男女によらず^(自害)じがいせんと思ひたる事ありや。

訂正

『流通経済大学論集』通巻第 148 号所収の拙稿「『コリヤード 懺悔録』ポルトガル語全訳注——第六誠「邪淫を犯すべからず」に関わる 15 の告解」113 ページ 1 行目を謹んで下記のとおり訂正する。

(誤) /p.36/ Rocuban no von voqite nitçuite [六^{ろくばん}番の御掟^{おんおきて}について].

(正) /p.36/ Rocuban no go voqite nitçuite [五^{ごばん}番の御掟^{ごおきて}について].

Goban no mandamiento⁵ ni tçuite [五^{ごばん}番のマダメントについて]

⁵ «Daigo, fito uo corosu becarazu» [第五, 人を殺すべからず] (NIPPON NO IESVS no Companhia no Superior yori Christan ni sōtō no cotouari uo tagaino mondō no gotoqu xidai uo vacachi tamō DOCTRINA, p.50); «Ho quinto mandamēto he: “Nō matarás”» (O Cathecismo Pequeno de D. Diogo Ortiz, p.187); «Não mates» (Bíblia Sagrada. Boa Nova); «Não matarás» (Bíblia Sagrada. Para o Terceiro Milénio da Encarnação).

Circa quintum praeceptum.
Acerca do quinto mandamento.

PRIMEIRA CONFISSÃO ACERCA DO QUINTO MANDAMENTO

Soregaxi, iocoxima⁶ no michi uo mi xiranu uosanai⁷ mono ni tezzucara⁸ no inracu⁹ uo catari, xiiō uo made mo uoxiie susumete, sono acu uo uoca saxe¹⁰ maraxita.

それがし よこしま みち み し をさな もの て いんらく かた し
某, 邪の道を見知らぬ幼い者に手づからの淫樂を語り, 為
やう 様をまでも教へ勧めて, その悪を犯させました。

私, 邪の道を未だ知らぬ幼い者に手ずからの淫樂, つまり自慰行為について語り, そのやり方までこれに教え勧めて, この悪を犯させました〔手淫を少年に勧める〕。

In primis quemdam innocentem quī luxuriæ viam adhuc nesciebat, docui substantiam & modum habendi pollutiones voluntarias & illi vt hoc peccatum committeret persuasi.

Contei a uma criança, que ainda não conhecia o caminho ruim, o prazer luxurioso adquirido com a própria mão – masturbação –, e até lhe ensinei como proceder, persuadindo-o a fazê-lo, conseguindo finalmente que este cometesse o dito pecado.

SEGUNDA CONFISSÃO ACERCA DO QUINTO MANDAMENTO

Mata iigaruru mono ni uarui iqen uo cuuaiete, mortal toga uo xeraruru

⁶ Yocoximana [邪な]. *Cousa que vai fora de caminho, & do que dita a razão* (Vocabulario, f.322v).

⁷ Vosanai [幼い]. *Cousa do minino, ou de pouca idade* (Vocabulario, f.284). Cf. Vosanō [幼う]. *Aduer* (Vocabulario, f.284). Vosanaxij [幼しい]. *Cousa de mininos*. ¶ Vosanaxij cotouo yū [幼しい事を言ふ]. *Dizer cousas de mininos* (Vocabulario, f.284).

⁸ Tezzucara [手づから]. *Adu. Com a propria mão, ou por suas mãos*. ¶ Tezzucara monouo itasu [手づから物を致す]. *Fazer algũa cousa com as proprias mãos* (Vocabulario, f.322v).

⁹ Inracu [淫樂]. *Deleitação torpe, ou gostos carnaes* (Vocabulario, f.322v).

¹⁰ Saxe [させ], Sasuru [さする], Saxeta [させた]. *Fazer fazer algũa cousa* (Vocabulario, f.220v).

32

rozaxi ga átte , maichido ua sanomi fucô gozarananda :
tâda zanzato touôri maraxita .

Mata iotabi aru padre fama no guiôgui uo miga tçûqi ai
no mônô domo foxiraruru uo quite , sôre uo tógame-
nu nominarazu , qêccu dôxin xite uaremo sôno go mem-
bocu ni ataru coto uôba ai foxiri maraxita . tocacu sôno
iôriai no niniu ua mina sôre uo iô xiraretarêdomo
Deus no go miôdai no acûguiô mo tóri atçucôte zôtan-
no daimocu to naitâga uarui to zonji nagara ita ita coto
va miga aiamari giá .

Sôno foca , fuqimá mo nôte miga fufu no uie ni rinqi na co-
coro uo uocoite , aite mâte tare to mo jafui xite , ninin-
nagara nicui arçu to uomô ; narâba docûde nari tômo
ûchi corosô to zonji maraxita cotô ga nido gozatta .

Mata nhóbô côdomo no iaxina nitçuite saicacu cocôrô-
gâqe mo xicaxica gozarâide , sôno xindai , guiô gui , Chri-
stian no ioi catâgui nândo , made canavaide ua no cò-
to narêdomo ; ima made zuibun itaxi maraxêide miga-
tôga de gozaru .

Goban no mandamiento nitçuite :

S Orêgaxi , iocoxima no michi uomi xiranu uo sanai mônô
ni tézzucara no inracu uo catari xi io uo mâte mo uoxi-
je susumete , sôno acu uo uoca saxe maraxita .

Mata iîâgaru mônô ni uarui iqen uo cuuaiete mortal tôga
uo xeraruru motôzzuqi ni nari maraxité gozaru .

Sôno foca , mata : miga xiru fito fitôri ni uarui coto uo tçu-
tôme ni iqu coto nari canavaide uare zonji nagara tômo
mo itaxi , sôre ni cõre ocu mo soie mxaraita . core ua itçu
tabi de gozatta .

Mata : uatacuxiga nhóbô uo motta musuco ga aru , sono uo-
nna miga iôme to sai sai cõron xite icôn uo fucûmi , xi-
ne caxi , ûchi jini auarê gana ! minicni to zônjite , nan-
tomo uarêga meni cacararenu lõni itasôzuru ni ua to uo-
mô maraxita coto ua totabi fôdo de gozatta .

Sôno iie ; qiriôna uotôco to qenqua xite , achi câra mi uo
sâxi

34

săxi corosó to xerareta rédomo, vâre va feifō no jōzū de gozarēba, tocacu aiteni vobitātaxij futatçu mitçu no qizu vo tçūqe maraxita. mata sōno qizu voi mōno no qiōdai to xinrui, sōno fēnpō to xitē, vñimuni, vare vo teppō de nari tomō nandenari tomō ūchi corosó to iuare tato qiqi voiōda tōqi va mǎnqi na cocōro vomōtte ano aitçumē ga mina ūchi fatasó to cūchi demo faqi, coco-rōde mo zonji maraxitē gozāru aida va mitçuqi fōdo de gozatta. Sari nagara are va, quaiqi xerarete nōchi, nācanavōri itaxi maraxite; ima chicāgōro chiin de gozaru, sōno cufuri, ixa nando no zōfa va icai cōto to uqe tamōtta rédomō aite cāra sōno qēnqua vo xicaqerarēta tocōrōde mi va cocoroiafu sōno xitçui ni nanimo iarimaraxeide gozaru.

Mata aru fito vatacūxi ga cōto varū fata xerareta to qiqi ieta ni jotte iūqi ōte mō rei vo xi, futatçuqi no aida ni ichigō mō mōxi ire maraxenande gozāru iie va cōno giū āno fito iurūxi vo coi ni iararetarēdomo, icon gāmāda fūgui maraxeide, tçūini iurūfanan de gozaru.

Sōno iie faxeranu cōto nitçūite fito to chicuchicuto xita qēnqua cōron, norōigoto, fara vo tatēte accō zōgon vo ijtçuqeta coto, tē va xīgueō gozatta. nōchi va nācanavōri vo xi, iurūxi mo tagaini coi marasūru.

R. Mata: vāga votto va īgi no varui mōno narēba mīzzu-cāra vo vttçu, tataitçu xeraruru ni jotte, sōno co vo moqenut ameni mi mōchi ni natte cāra fara vo nēgitte, sōno co vo voroxi maraxita.

R. Sōno foca: varera finnin xīgocu de gozarēba co ròcunin o mōchi māraxita. sōre vo sodatçuru io mo gozaraide, quaitai ni nāru mai tameni caracūri mo itaxi marasūru. ichido mo quai nin ni natte cāra cufuri vo mochiite, mutçuqi no cō vo vorōxi, ichido mata fan no jibūn ni co vo fumi coroitte, fucuchū cara xinde vmareta to mōxi maraxitē gozāru.

Rōcu-

motozzuqi¹¹ ni nari maraxite gozaru.

また、厭^{いや}がる者に悪い^{もの}異見^{わる}を加^{いけん}へて、モルタル科^{とが}をせらるる基^{もと}づきになりまらしてござる。

また、ある者に悪しき忠告を与えて——彼がその受け入れを嫌がっているにもかかわらず——、モルタル科を犯しなざるその原因をつくってしまいました。

Fui etiam causa quòd quidam alias nolens; ex meo consilio peccatum mortale committeret.

Mais: dei um mau conselho a um conhecido meu, o qual não queria inicialmente aceitá-lo, fazendo com que ele cometesse um pecado mortal.

TERCEIRA CONFISSÃO ACERCA DO QUINTO MANDAMENTO

Sono foca, mata: miga xiru fito fitori¹² ni uarui¹³ coto uo tçutome ni iqu¹⁴ coto nari canauaide, uare zonji nagara tomo mo itaxi, sore ni cõreocu mo soie maraxita¹⁵. Core ua itçutabi¹⁶ de gozatta.

その外^{ほか}また、身^みが知人^{しるひとひとり}一人に悪い^{わる}ことを勤め^{つと}に行くことなり叶^いは^{かな}いで、我^{われぞん}存^{とも}じながら供^{いた}も致^{いた}し、それ^{かふりよく}に合^そ力^{りよく}も添^そへまらした。これ

¹¹ Trata-se da forma substantivada do verbo «Motozzuqu» [基づく] registado no *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, o qual é definido como «Chegar, ou aferrarse. *Vt*, Ienno michini motozzuqu [善の道に基づく]. *Chegar, ou entrar no caminho da virtude*» (f.167v). Frei Colhado define a forma verbal da palavra em questão, escrevendo o seguinte no seu *Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm*: «*Ad principium & originem reuertor, eris. Boluerse a su principio. Motozzuqi [基づき], Motozzuqu [基づく]*» (p.105).

¹² Fitori [一人]. *Hum homem, ou hũa molher* (*Vocabulario*, f.350).

¹³ Varui [悪い]. *Cousa ruim, ou que não conuem*. Varũ [悪う]. Varusa [悪さ] (*Vocabulario*, f.268v).

¹⁴ Iqi [行き], Iqu [行く], Ita [行た]. *Ir. Meliũs*, Yuqi [ゆき], Yuqu [ゆく]. *Vt*, Arimaye iqu [有馬へ行く], I, Arimaye yuqu [有馬へゆく] (*Vocabulario*, f.132v).

¹⁵ «mxaraita» *in textu*.

¹⁶ Substantivo composto de «Itçutçu» [五つ] e «Tabi» [度]. Ainda que o verbete «Tabi» não se veja no *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, a palavra em questão aparece várias vezes como um elemento constituindo outros verbetes como por exemplo: «Fitotabi [一度]. *Modo de contar vezes*» (f.350); «Icutabi [幾度]. *Quantas vezes?*» (f.129v).

は五度^{いつたび}でござった。

そのほかまた、私の知人がひとりでは悪いことを行ないにゆけないと申しますので、私、この者の意図をよくよく知りながら供を致し、それに助力さえしてしまいました。こうしたことを五度行ないました〔友人の悪行への荷担〕。

Præterea: cum quidam mihi notus non posset ire ad quodam facinus perpetrandum, ego sciens & prudens illum associaui & adiuui, & hoc adiutorium quinques præstiti.

Além disso, um conhecido meu disse-me que não tinha a coragem necessária para praticar uma má acção sozinho, ao que eu, apesar de saber bem do seu ruim intento, não deixei de acompanhá-lo, tendo até sido seu cúmplice no pecado. Pratiquei-o cinco vezes.

QUARTA CONFISSÃO ACERCA DO QUINTO MANDAMENTO

Mata: uatacuxi ga nhôbô uo motta musuco ga aru. Sono uonna miga iome¹⁷ to saisai côron¹⁸ xite icon uo fucumi, xine caxi, uchijini¹⁹ auare gana! minicui to zonjite, nantomo uarega me ni cacararenu iôni itasôzuru ni ua to uomoi maraxita coto ua totabi fodo de gozatta.

また、私^{わたくし}が女房^{にようぼう}を持った息子^もが有る。その女^{むすこ}、身^あが嫁^{をんな}と細々^み々^{よめ}々^{さいさい}口論^{こうろん}して、遺恨^あを含み^{こん}、死ねかし^{かく}、打死^し逢はれがな! 見^{うちじにあ}にくいとぞん^みじて、何^{ぜん}とも我^{なん}が目^{われ}に懸^めかれぬ様^かに致^{やう}さうずるにはと思^{いた}ひまらしたことは、十度^{とたび}ほどでござった。

また、私には女房持ちの息子がおります。息子の嫁は私の妻と再々口論を致しますので、私はその嫁に遺恨を含むようになりました。かような嫁は死ねばよい、死ぬような目に遭うがよい、二度と顔も見たくないと思い、これと顔を合わすことのないように致

¹⁷ Yome [嫁]. Nora. ¶ Yomeuo mucayuru [嫁を迎ゆる]. Casar ao filho, ou tomar mulher pera o filho (Vocabulario, f.323v).

¹⁸ Côron [口論]. Contenda de palauras (Vocabulario, f.59).

¹⁹ Vchijini [討ち死に]. O morrer na guerra pelejando. Vt, Vchijini suru [討ち死にする] (Vocabulario, f.271).

さねば、と思うことが一〇度ばかりございました。

Insuper: ego habeo filium qui iam habet vxorem: cum hac ergo nuru multoties verbis altercans, aduersus illam odium concepi, desiderauique decies vel quod moreretur, vel quomodolibet occideretur, vel sic facere quod nunquam illam viderem, & hoc procurasse desiderauit.

Mais: tenho um filho já casado. A noiva dele tem constantes algazaras com minha mulher, pelo que criei rancor dela, desejando até que morresse ou pelo menos sofresse a agonia da morte, por fim, fiz votos para que não me aparecesse nem se abeirasse de meus olhos. Isto aconteceu dez vezes.

QUINTA CONFISSÃO ACERCA DO QUINTO MANDAMENTO

Sono uie: qiriō²⁰ na uotoco to qenqua xite, achi cara mi uo /p.34/ saxi²¹ corosō to xerareta redomo, vare va feifō²² no jōzu²³ de gozareba, tocacu aite ni vobitaxii²⁴ futatçu mitçu no qizu²⁵ vo tçuqe maraxita. Mata sono

²⁰ Cf. Qiriō [器量]. *Gentileza*. ¶ *Item, Boa disposição, boas partes, & habilidades*. ¶ Qiriōna fito [器量な人]. *Homem bem afamado, & apessoado*. ¶ Qiriō cotgara [器量骨柄]. *Gentileza, & boa disposição, ou forma de corpo* (*Vocabulario*, f.200). Como é naturalíssimo, a presente palavra é mais bem explicada por frei Colhado no seu *Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm*: «Robustus. Valiente y robusto. Qiriō na [器量な]» (p. 117).

²¹ Saxi [刺し], Sasu [刺す], Saita [刺いた]. ¶ *Item, Dar estocada*. *Vt, Nanacatana made saita* [七刀まで刺いた]. *Deu lhe sete estocadas com a Catana* (*Vocabulario*, f.221).

²² Cf. Feōfō [兵法]. *Arte desgrima*. *Vide Fiōfō* [兵法] (*Vocabulario*, f.86v). Fiōfō [兵法], l, Feōfō [兵法]. Tçuamonono nori [兵の法]. i, Feifōno coto [兵法の事]. *Arte de esgrima* (*Vocabulario*, f.91v).

²³ Iōzu [上手]. Vuate [上手]. i, Iōteno mono [上手の者]. *Destro em algũa cousa* (*Vocabulario*, f.145v).

²⁴ Vobitaxij [夥しい]. *Cousa grande, & que espanta muito*. Vobitaxisa [夥しさ]. Vobitaxū [夥しう] (*Vocabulario*, f.275).

²⁵ Qizu [傷・疵・瑕・創]. *Cutilada, ou ferida*. ¶ Qizuuō cōmuru [傷を被る]. *Receber algũa ferida*. ¶ *Item, Infamia, defeito, &c*. *Vt, Nani tçuita qizuuā matdai madeua yomo vxaji* [名に付いた瑕は末代まではよも失せじ]. *Yax. A infamia, ou nodoa que se poem no nome não se apaga já mais pera sempre*. ¶ Qizuuō iyasu [傷を癒す]. *Curar a ferida*. ¶ Qizuuō tçuçuru [創を付くる]. *Dar ferida, ou fazer sinal, ou mōça com ferro, &c* (*Vocabulario*, f.202v).

qizu voi²⁶ mono no qiōdai²⁷ to xinrui²⁸, sono fēnpô to xite, vñimuni, vare vo teppô²⁹ denaritomo nandenaritomo uchi corosô to iuareta to qiqi voiôda toqi va, manqi na cocoro vo motte ano aitçume³⁰ga, mina uchi fatasô to cuchi demo faqi, cocoro demo zonji maraxite gozaru aida va mitçuqi fodo de gozatta. Sari nagara are va quaiqi³¹ xerarete nochi, nacanavori³² itaxi maraxite, ima chicagoro³³, chiin de gozaru. Sono cusuri³⁴, ixa³⁵ nando no zōsa³⁶ va icai³⁷ coto to uqetamotta³⁸ redomo,

²⁶ Voi [負ひ], Vô [負ふ], Vôta [負うた]. *Ter, ou leuar algũa cousa às costas. Vt, Niuo vô [荷を負ふ]. Leuar fato às costas. ¶ Item, Deuer. Vt, Fiacumeuo vô [百匁を負ふ]. Deuer cem mazes. ¶ Item, Receber, ou ser lhe imposto algum crime. Vt, Togauo vô [科を負ふ]. ¶ Teuo vô [手を負ふ]. Ser ferido, ou receber ferida (Vocabulario, f.278v).*

²⁷ Qiōdai [兄弟]. *Irmão (Vocabulario, f.198).*

²⁸ Xinrui [親類]. *Parentes (Vocabulario, f.304).*

²⁹ Teppô [鉄炮]. *Espingarda (Vocabulario, f.255v). «teppô» in textu. Ainda não se pode determinar se se deveria corrigir para «Teppô» conforme ao Vocabulario da Lingoa de Iapam.*

³⁰ Aitçu [あいつ], I, Aitçume [あいつめ]. Aitçumega [あいつめが]. *Aquelle. Fallando com desprezo, & abatimento (Vocabulario, f.6v).*

³¹ Quaiqi [快気]. Cocoroyoi qi [快い気]. *O recuperar a saude primeira. Vt, Quaiquuo vru [快氣を得る]. I, Quaiqi suru [快氣する] (Vocabulario, f.203v).*

³² Nacanauori [中直り]. *O Fazer as amizades. Vt, Nacanauoriuo suru [中直りをする] (Vocabulario, f.173).*

³³ Chicagoro [近比]. *Adu. Muito. Palaura de encarecer o bem, ou mal. Vt, Chicagoro migotogia [近比見事ぢや]. Esta muito pera ver, ou apraziuel (Vocabulario, ff.46v-47).*

³⁴ Cusuri [薬]. *Mezinha. ¶ Cusuriuo auasuru [薬を合はする]. Fazer mezinhas. ¶ Cusuriuo tçucuru [薬を作る]. Por mezinhas. ¶ Cusuriuo xenzuru [薬を煎ずる]. Cozer mezinhas. ¶ Cusuriuo vorosu [薬を下ろす]. Pizar mezinhas, ou moelas em gral. ¶ Cusuriga qicu [薬が効く]. Ter a mezinha effeito, ou obrar. ¶ Cusuriuo guâzuru [薬を丸ずる], I, Cusuriuo maromuru [薬を丸むる]. Fazer a mezinha em pilouros como pirolas, &c. ¶ Cusuriuo atayuru [薬を与ゆる]. Dar mezinhas. ¶ Cusurino fô [薬の方]. Receita que dão os medicos de mezonhas (Vocabulario, ff.67v-68).*

³⁵ Ixa [医者]. *Medico (Vocabulario, f.137).*

³⁶ Zōsa [造作]. Tçucuri tçucuru [造り作る]. *Obra, ou fabrica. ¶ Item, Trabalho, custo, gasto, &c. ¶ Zōsano iru coto gia [造作の要る事ぢや]. He cousa de muito negocio, gasto, &c (Vocabulario, f.329).*

aite cara sono qenqua vo xicaqe³⁹ rareta tocorode mi va cocoroiasũ sono xittçui⁴⁰ ni nani mo iari maraxeide gozaru.

その上、器量な男と喧嘩して、あちから身を刺し殺さうとせられたれども、我は兵法の上手でござれば、とかく相手に 夥しい二つ、三つの疵を付けまらした。またその疵負者の兄弟と親類、その返報として、有に無に我を鉄炮でなりとも何でなりとも撃ち殺さうと言はれたと聞き及うだ時は、慢気な心を以って、あのあいつめが、皆討ち果たさうと口でも吐き、心でも存じまらしてござる間は三月程でござった。さりながら、あれは快気せられて後、

³⁷ Icai [いかい]. *Cousa grande, ou extraordinaria*. ¶ Icai cotouo mita [いかい事を見た]. *Vi hũa grãde cousa* (*Vocabulario*, f.127).

³⁸ O verbo «Vqetamoru» [うけたもる], cuja raiz é «Vqetamori» e cujo passado é «Vqetamotta», não se regista no *Vocabulario da Lingoa de Iapam*, mas aparece a seguinte definição no *Dictionarivm sive Thesavri Lingvæ Iaponicæ Compendivm* compilado por frei Colhado: «Audio, is. Oir persona medianamente honrrada. Vqe tamori [うけたもり], Vqe tamoru [うけたもる]» (p.13). Cf. Vqetamauari [承り], Vqetamauaru [承る], Vqetamauatta [承った]. *Ouir honrando a pessoa com quem se fala* (*Vocabulario*, f.287v). Vqetamõri [承り], Vqetamõru [承る], Vqetamõtta [承った]. i, Vqetamauari [承り], Vqetamauaru [承る]. ¶ Goyôaraba vqetamõre [御用あらば承れ], I, Goyôaraba vqetamõrõ [御用あらば承らう]. *Se tiuerdes algũa necessidade, dizeima, ou fazeimo a saber* (*Vocabulario*, f.287v). Quanto à primeira forma veja-se a explicação adicional no *Supplemento do Vocabulario da Lingoa de Iapam*: Vqetamauari [承り], Vqetamauaru [承る], Vqetamauatta [承った]. * ¶ *Item, Ouir em respeito de pessoa honrada* (f.390v).

³⁹ Xicaqe [仕掛け], Xicaquru [仕掛くる], Xicaqeta [仕掛けた]. ¶ Qenquauo xicaquru [喧嘩を仕掛くる]. *Começar primeiro a briga, ou prouocar e ella*. ¶ Yumiyauo xicaquru [弓矢を仕掛くる]. *Fazer guerra a alguem* (*Vocabulario*, f.299).

⁴⁰ Xittçui [失墜]. Vxinai tçuiyasu [失ひ費やす]. *Custo, ou perda* (*Vocabulario*, f.307v).

なかなかほ いた 仲直り致しまらして、今^{いま}近^{ちか}比^ひ知音^{ちいん}でござる。その薬^{くすり}・医者^{いしや}なんど
の造^{さう}作^さはいかいことと承^{うけたも}ったれども、相手^{あいて}からその喧嘩^{けんか}を仕掛^{しか}け
られたところで、身^みは心^{こころ}安^{やす}う、その失墜^{しつつい}に何^{なに}も遣^やりませいでご
ざる。

さらに、ある勇猛な男と喧嘩を致しましたとき、あちらから私を刺し殺そうとしたのでございますが、私は剣術の上手でございますから、相手にはふたつか三つ、かなりの深手を負わせました。私のために疵を負わされた者の兄弟・親類が、仕返しとして、是非とも私を、鉄炮によってであれ何によってであれ、撃ち殺そうと言っていると聞き及びましたとき、私は、高慢にも、何をあのたわけめが、かえって皆返り討ちにしてくれようと口にも出し、心中に思うこと三月ほどに及びました。しかしながら、かの者の疵が快気した後、これと仲直りを致し、今は非常な知音の間柄でございます。疵の治癒に要した薬・医者^{いしや}の費用は大層なものと承りましたものの、喧嘩を仕掛けて参りましたのはあちらでございますから、私としてはいささか心安く、彼の損害に対しては何も致しませんでした。

Præterea: cum vice quadam cum quodam viro forte rixamet /p.35/ prælium seu certamen commissem; quamvis ille procurauerit me occidere; cum tamen ego sim in digladiando valde dexter denique duobus ictibus grauitè illum percussi, quod cum percussi fratres & consanguinei cognouissent, & ego audiuissè illos dixisse quod in omni euentu & eo modo quo possent sclopo saltim me intentaturi essent occidere, superbia elatus per triū mensium spatium & illos odio habui, & illos omnes me occisurum ore protuli sæpius, cordeque huiusmodi resolutionem conseruau; sed cū percussus pristinae fuisset valetudini restitutus ad inuicem sumus facti amici, modoq. est mihi valde charus. bene noui magnos sumptus quos prædictus fecit in medicinis, medicis, & chirurgis, sed cum ipse fuerit causa & incæperit prædictum certamen, ego absque scrupulo ad sumptus nihil contribui.

Mais: quando briguei com um homem valente e robusto, ele tentou matar-me, dando-me uma[s] estocada[s], mas como sou hábil na arte de esgrima, dei-lhe duas ou três fortes cutiladas. Quando soube do rumor de que os irmãos e os parentes do ferido, jurando vingança, queriam matar-me quer com espingarda quer com outra arma qualquer, tive a soberba de dizer e pensar, durante três meses, que mataria todos aqueles sujeitos que me tentassem assassinar. Depois do ferido ter recuperado, reconciliei-me

com ele, tendo-nos tornado agora amigos muito íntimos. Ainda que tenha ouvido dizer que fora enorme o custo por ele pago, tanto nos medicamentos como no médico, não me preocupei nem o indemnicei pelos danos por mim causados, já que tinha sido ele quem me tinha provocado primeiro e começado a briga.

SEXTA CONFISSÃO ACERCA DO QUINTO MANDAMENTO

Mata aru fito vatacuxi ga coto varũ sata xerareta to qiqi ieta ni iotte, iuqi uõte⁴¹ mo rei⁴² vo xi, futatçuqi no aida ni ichigo⁴³ mo mõi ire⁴⁴ maraxenande gozaru uie va, cono giũ ano fito iuruxi vo coi⁴⁵ ni iarareta redomo, icon ga mada sugui maraxeide, tçuini iurusanande gozaru.

また、ある人^{ひと} 私^{わたし} が事^{こと}悪^{わる}う沙汰^{さた}せられたと聞き得^{きえ}たによって、
 行き合^{ゆあ}うても礼^{れい}をし、二月^{ふたつき}の間^{あひだ}に一語^{いちご}も申し入れ^{まうい}ませなんでござる上^{うへ}は、この中^{ちゅう}あの人^{ひと}、赦^{ゆる}しを乞^こひに遣^やられたれども、遺恨^{ゐこん}が
 まだ過^すぎませいで、終^{つひ}に赦^{ゆる}さなんでござる。

また、ある者が私のことを悪し様に噂していると聞きこんで参りましたが、かの者は、案の定、私に行き逢うても挨拶もせず、二月の間、一言たりとも私に話しかけもしません。このことについて、かの者は私の赦しを乞うため人を寄越しましたが、恨みが消え

⁴¹ Yuqiai [行き合ひ], Yuqiõ [行き合ふ], Yuqiõta [行き合うた]. *Encontrarse indo* (Vocabulario, f.326v).

⁴² Rei [礼]. *Reuerencia, & cortesia. Item, Graças, ou palauras de agradecimento, &c.* ¶ Reiuo suru [礼をする]. l, Reiuo itasu [礼を致す]. *Fazer reuerencia como inclinando a cabeça, ou dobrandose, &c.* ¶ Reiuo yũ [礼を言ふ], l, Reiuo mõi [礼を申す]. *Saudar a alguém, ou dar lhe as graças* (Vocabulario, f.207v).

⁴³ «ichigõ» *in textu*. Dever-se-ia corrigir para «Ichigõ» ou «Ichigon», que é quase igual a «Ichigo». Cf. Ichigon [一言]. *Hũa palaura* (Vocabulario, f.128).

⁴⁴ Mõiire [申し入れ], Mõiiruru [申し入る], Mõiireta [申し入れた]. *Dizer a alguém.* ¶ Annaiuo mõiiruru [案内を申し入る]. *Fazer a saber* (Vocabulario, f.168).

⁴⁵ Coi [乞ひ], Cõ [乞ふ], Cõta [乞うた]. *Pedir* (Vocabulario, f.55v).

ることはなく、結局赦しは致しませんでした。

Cum audissem etiam, quendam de meis rebus male fuisse loqutum, etiam si obuium illum habeã illũ nullo modo saluto, neque per duos menses aliquod verbum sum ei alloqutus. cum verò hisce diebus ille vt a me veniam peteret misisset, conseruans adhuc odium contra illum, petitam veniam non concessi.

Mais: ouvi dizer que certa pessoa dizia mal de mim, a qual não me saudou, nem me disse cousa alguma durante dois meses, ainda que se tivesse encontrado comigo. Apesar de ele me ter, posteriormente, mandado pedir desculpas pelo sucedido, ainda tenho queixas, não o tendo por isso perdoado.

SÉTIMA CONFISSÃO ACERCA DO QUINTO MANDAMENTO

Sono uie saxeranu coto nitçuite, fito to chicu chicu to⁴⁶ xita qenqua, cõron, noroigoto⁴⁷, fara vo tatete accô⁴⁸ zõgon vo iitçuqeta coto tô va xigueô gozatta. Nochi va nacanavori vo xi, iuruxi mo tagaini⁴⁹ coi marasuru.

その上^{うへ}、させられぬことについて、人^{ひと}とちくちくとした喧嘩^{けんくわ}・
口論^{こうろん}・呪^{のろ}ひ言^{ごと}、腹^{はら}を立てて悪口^た・雑言^{あつこう}を言^{ざふごん}ひ付^いけたこと等^つは繁^{とう}う
ござった。後^{のち}は仲直^{なかなほ}りをし、赦^{ゆる}しも互^{たが}ひに乞^こひまらする。

さらに、些細なことについて、少しずつではありますが、人と喧嘩・口論をし、これを呪う言葉を吐き、腹を立てて悪口雑言を吐いたことが頻繁にございました。ただしそ

⁴⁶ Chicuchicu [ちくちく]. *Pouco a pouco* (Vocabulario, f.47). Chicuchicuto [ちくちくと]. *Idem* (Vocabulario, f.47).

⁴⁷ Noroigoto [呪ひ言]. *Pragas*. ¶ Noroigotouo yũ [呪ひ言を言ふ]. *Dizer pragas* (Vocabulario, f.186v).

⁴⁸ Accô [悪口], Varucuchi [悪口]. *Injuria de palavras, ou ruins palavras*. ¶ *Vt*, Accô suru [悪口する]. *Maldizer*. ¶ Accôuo facu [悪口を吐く]. *Idem*. ¶ Accô zõgon [悪口雑言]. *Injuria de palavras* (Vocabulario, f.2v).

⁴⁹ Tagaini [互いに]. *Aduerb. Entre si*. *Vt*, Tagaini mōxicauasu [互いに申し交わす]. *Falar entre si prometendo de fazer algũa cousa* (Vocabulario, f.236v).

の後、私どもは仲直りをし、互いに赦しを乞い合っております。

Præter hoc: circa res nullius momenti cū aliquibus cōcertasse verbis, rixasque habuisse paruas, illos maledixisse, contumelijs & malis verbis affecisse & alia huiusmodi fuit frequens: sed statim amicitiam facimus, & adinuicem veniā petimus.

Além disso: frequentemente, em relação a coisas de pouca monta, briguei e discuti com uns, tendo praguejado doutros. Em relação a outros mais, ofendi-os várias vezes, agastando-me com eles. Mais tarde, porém, reconciliámo-nos todos, perdoando-nos mutuamente.

OITAVA CONFISSÃO ACERCA DO QUINTO MANDAMENTO

R. Mata: vaga votto⁵⁰ va igi no varui mono nareba mizzucara⁵¹ vo vttçu⁵², tataitçu⁵³ xeraruru niotte, sono co vo mōqenu⁵⁴ tameni

⁵⁰ Votto [夫]. *Marido* (Vocabulario, f.390).

⁵¹ Mizzucara [自ら]. *Eu mesmo. S.* (Vocabulario, f.163).

⁵² Vchi [打ち・撃ち・討ち], Vtçu [打つ・撃つ・討つ], Vtta [打った・撃った・討った]. *Bater, ou dar pancadas.* ¶ Cauouo vtçu [顔を打つ]. *Dar bofetadas.* ¶ Tequuo vtçu [敵を討つ]. *Dar nos inimigos matandoos.* ¶ Tçuzzumiuo vtçu [鼓を打つ]. *Tanger hum certo tabaquinho.* ¶ Bacuchiuo vtçu [博奕を打つ]. *Iugar os dedos.* ¶ Caneuo vtçu [鉦を打つ]. *Iurar certo juramento batendo com hum ferro noutro.* ¶ Gouo vtçu [碁を打つ]. *Iugar hum certo jogo de muitas pedrinhas.* ¶ Fitouo vtçu [人を討つ]. *Estâcar, ou matar a alguém.* ¶ Mizzuuo vtçu [水を打つ]. i, Mizzuuo sosoqu [水を注ぐ]. *Botar agoa com a mão, ou agoar.* ¶ Item, *Fazer certas obras de mãos.* *Vt, Vmano curauo vtçu* [馬の鞍を打つ]. *Fazer sela de caualo.* ¶ Yumiuo vtçu [弓を打つ]. *Fazer arcos de atirar.* ¶ Yumi vchi [弓打ち]. *Official de arcos.* ¶ Muxirouo vtçu [蓆を打つ]. *Fazer esteiras, &c.* ¶ Vouo vtçu [緒を打つ]. *Fazer cordões, ou trança, &c.* ¶ Catanauo vtçu [刀を打つ]. *Fazer espadas.* ¶ Taouo vtçu [田を打つ]. *Laurar, ou cauar as varzeas.* ¶ Qirimuguiuo vtçu [切り麦を打つ]. *Fazer aletria de trigo.* ¶ Fiuo vtçu [火を打つ]. *Ferir fogo.* ¶ Toriuo vtçu [鳥を打つ]. *Tomar com rede marrecas que se leuantão do chão, & vão voando.* ¶ Torivchi [鳥打ち]. *Lugar onde tomão estas marrecas com rede que se lhes lança em cima.* ¶ Fatouo vtçu [鳩を打つ]. *Tomar pombas com rede de tombo.* ¶ Vchiami [打ち網]. *Rede de tombo de tomar passaros, ou rede como tarrafa pera tomar peixe.* ¶ Tçuruuo vtçu [弦を打つ]. *Tocar na corda do arco puxando por ella pera ver se soa bem. Item, per meta. Ver, & palpar algũa cousa que hum quer saber, &c.* ¶ Este verbo se ajunta, & cōpoem com muitos outros. *Algũas vezes dà mais força, & enfasi: & outras no mais que elegancia, como se verá a baixo* (Vocabulario, f.270).

mimochi⁵⁵ ni natte cara fara vo negitte⁵⁶, sono co vo voroxi maraxita.

弟子 また、我が夫は意地の悪い者なれば、自らを打つ叩い
つせらるるによって、その子を儲けぬために、身持ちになってから
腹を捻ぢって、その子を墮ろしませした。

弟子 また、わが夫は意地の悪い者でございまして、私を打ったり叩いたり致しますので、その子を儲けぬよう、一度、妊娠してしまってから腹を捻ぢって、これを墮ろしてしまいました〔不自然な手段による墮胎〕。

Cum maritus meus sit natura bilosus me vel manibus aut alio quouis modo percutere, & cedere non cessat: ego vero ne ex illo filios habeam, & procreem: postquam grauidam esse sensi, ventrem fortiter torquens, filium aboririfeci.

R. Mais: como o meu marido é de má índole, bate-me e espanca-me com violência; ao estar grávida, abortei por meio de «torcer a barriga»⁵⁷ de forma a que o bebé não nascesse.

NONA CONFISSÃO ACERCA DO QUINTO MANDAMENTO

R. Sono foca: varera finnin xigocu⁵⁸ de gozareba⁵⁹, co rocunin vo⁶⁰

⁵³ Tataqi [叩き], Tataqu [叩く], Tataita [叩いた]. *Bater, ou dar pancadas*. ¶ Ano yatçuuu tataqe [あの奴を叩け]. *Dai naquela madraço, espancayo, &c.* ¶ Monuo tataqu [門を叩く]. *Bater à porta (Vocabulario, f.242).*

⁵⁴ Mõqe [儲け], Mõquru [儲くる], Mõqeta [儲けた]. *Ganhar. ou aquirir*. ¶ Couo mõquru [子を儲くる]. *Nacer a alguém filho (Vocabulario, f.166v).*

⁵⁵ Mimochi [身持ち]. *Prenhidão*. ¶ Cano vonna mimochi ni natta [かの女身持ちになった], l, Cano vonna mimochide gozaru [かの女身持ちでござる]. *Aquella molher està prenhe. Palaura de molheres (Vocabulario, f.160).* Cf. Mimochina [身持ちな]. *Molher prenhe (Vocabulario, f.160).*

⁵⁶ Negi [捻ぢ], Nezzuru [捻づる], Negita [捻ぢた]. *Torcer, ou torcerse algũa cousa*. ¶ Vt, Faxiraga negita [柱が捻ぢた]. *Entortouse, ou torceose a columna de pao*. ¶ Taqueo negiru [竹を捻ぢる]. *Quebrar algum bambu torcendoo (Vocabulario, f.180).*

⁵⁷ Não se sabe precisar, de modo concreto, a acção designada «torcer a barriga», ou seja, «Faraú negiru».

⁵⁸ Xigocu [至極]. Itari qiuaru [至り極まる]. *Cousa consumada*. ¶ Dõri xigocude gozaru [道理

mochi maraxita. Sore vo sodatçuru⁶¹ iõ⁶² mo gozaraide, quaitai⁶³ ni naru mai tameni, caracuri⁶⁴ mo itaxi marasuru. Ichido mo quainin ni natte cara, cusuri vo mochiite, mutçuqi no co vo voroxi, ichido mata san⁶⁵ no jibun⁶⁶ ni co vo fumi⁶⁷ coroite⁶⁸, fucuchũ cara xinde vmareta to mōxi

至極でござる]. *He razão que muito satisfaz, enche, ou enquadra* (Vocabulario, f.301). Cf. Xigocuna [至極な]. *Ibid* (Vocabulario, f.301). Xigocuni [至極に]. *Adu* (Vocabulario, f.301).

⁵⁹ No texto original japonês não se emprega a conjunção adversativa mas a causal. Julgo que a expressão «ter muitas crianças *por causa da pobreza*» não seria necessariamente estranha, dado que existia no Japão-Antigo uma tendência geral para que a camada não só rica mas também pobre desse à luz o maior número de filhos e contasse com estes como mãos-de-obra em trabalhos domésticos, lavoura, etc.

⁶⁰ «rocunin o» *in textu*.

⁶¹ Sodate [育て], Sodatçuru [育つる], Sodateta [育てた]. *Criar, ou sustentar*. ¶ Fitouo torisodatçuru [人を取り育つる]. *Criar a alguém, ou fazelo homem*. ¶ Qiuo vye sodatçuru [木を植ゑ育つる]. *Plantar, & criar aruores* (Vocabulario, f.224).

⁶² Yō [様]. *Modo, ou feição*. *Vt*, Fiacuyōuo xittemo, ichiyōuo xirazunba, arasō coto nacare [百様を知つても、一様を知らずんば、争ふ事勿れ]. *Prouerb. Ainda que saibas cem modos que ha de fazer hũa cousa, se hũa sō deixas de saber, não queiras disputar, dizendo que não ha tal* (Vocabulario, f.322).

⁶³ Quaitai [懐胎]. *I*, Quainin [懷妊]. *O estar prenhe*. *Vt*, Quainin xita nhonin [懷妊した女人]. *Molher que esta prenhe*. ¶ Quainin de gozaru [懷妊でござる] (Vocabulario, f. 203v).

⁶⁴ Forma substantivada do verbo «Caracuru». Cf. Caracuri [からくり], Caracuru [からくる], Caracutta [からくつた]. *Fazer, ou inuentar algũa cousa artificiosa* (Vocabulario, f.40).

⁶⁵ San [産]. Vmu [産む]. *Parto*. *Vt*, Sanuo tayasũ suru [産をたやすうする]. *Parir facilmente*. ¶ Sanno fimouo toqu [産の紐を解く]. *Parir* (Vocabulario, f.217).

⁶⁶ Iibun [時分]. *Tempo*. ¶ Iibun tōrai suru [時分到来する]. *Vir o tempo, ou hora de algũa cousa*. ¶ Iibũuo vcagō [時分を窺ふ]. *Buscar tempo, ou conjunção*. ¶ Iibunuo motte mairōzu [時分を以て参らうず]. *Eu irei a seu tempo*. ¶ Sōtōno jibun [相当の時分]. *Tempo conueniente pera fazer algũa cousa*. ¶ Iibun fazzureni monouo suru [時分外れに物をする]. *Fazer algũa cousa fora de tempo, ou de horas determinadas, &c* (Vocabulario, f.141v).

⁶⁷ Fumi [踏み], Fumu [踏む], Funda [踏んだ]. *Pisar*. ¶ Abumiuo fumu [鐙を踏む]. *Estribarse nos estribos*. ¶ Narauanu michino iuaneuo [maneio *in textu*] fumi, casanaru yamano yuqiuo vaqete [習はぬ道の岩根を踏み、重なる山の雪を分けて]. *Caminhando por cima das pedras ao longo*

maraxite gozaru.

弟子 ^{ほか} 其の外、我等^{われ}貧人^{ひんにん}至極^{しごく}でござれば、子^こ六人^{ろくにん}を持ち^もました。
それを^{そだ}育つる^{やう}様もござらいで、懷胎^{くわいたい}になるまい^{ため}為に^{いた}からくりも致
しまらす。一度^{いちど}も懷妊^{くわいにん}になってから、薬^{くすり}を用^{もち}ゐて、六月^{むつき}の子^こを
墮^おろし、一度^{いちど}また産^{さん}の時^じ分に子^こを踏^ふみ殺^{ころ}いて腹中^{ふくちゆう}から死^しんで産^うま
れたと申し^{まう}ましてござる。

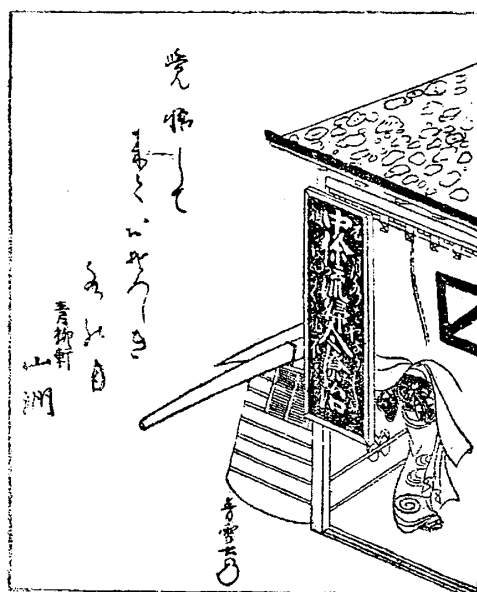
弟子 私ども、至極貧乏人でござれば、六人の子を儲けました。とはいえこれを育てる
すべもございませず、懷胎せぬよう、いろいろとからくりも致します〔産児制限〕。ある
ときなど、懷妊してから、薬を飲んで六月の子を墮ろし〔墮胎——服薬による〕、また別の
ときには、分娩後にこれを踏み殺して、腹中から死んで産まれた、つまり死産であつた
と申しましてございます〔間引き〕。

*Præterea: ego sum in summa paupertate constituta: habeoque sex filios, neque habeo modum
quo possim illos alere: vnde ne amplius efficerer grauida, multas inuētiōnes adhibui, & postquam
etiam me grauidam esse cognoui accepi medicinam qua proles est aborta cum iam esset sex
mensium. semel etiam tempore partus filium pedibus conculcans occidi; dixi tamen ex ventre
natum fuisse mortuum.*

R. Para além disso: por sermos extremamente pobres, tivemos seis
crianças. Não tendo, porém, como criá-las e sustentá-las, utilizámos
diversas invenções artificiosas de modo a não surgir nenhuma gravidez.
Certa vez, estando no sexto mês de gravidez, mediante uma mezinha,
abortei um embrião. Uma outra vez, logo após o parto, matei o bebé

*da rocha que não era costumado andar, & rompendo pella neue dos montes multiplicados hũs
sobre os outros. ¶ Tatarauo fumu [鑪鞴を踏む]. Fundir metal, ou ferro aleuantando hũa certa
maneira de folles com os pès. ¶ Carausuuo fumu [碓を踏む]. Pilar arroz com pilão que se
aleuanta com os pès. ¶ Fiōxiuo fumu [拍子を踏む]. Fazer mudança com os pès em bailo, &c
(Vocabulario, f.107).*

⁶⁸ Fumicoroxi [踏み殺し], Fumicorosu [踏み殺す], Fumicoroita [踏み殺いた]. *Matar com os
pès, ou aos couces (Vocabulario, f.107v).*



覚悟して来ておそろしき水の月

「元祖中条流婦人療治月水はやながし、けんなくば札不要」と記された看板を掲げた入り口の暖簾をくぐってゆく後ろ姿。帯の結び方から結婚前の女性であり、傍らに停めてある長柄の駕籠から武士階級に属する人であると判る（『名物かのこ 上』享保18〔1733〕年）。小野眞孝『江戸の町医者』（新潮選書、1997年）より



徳満寺の間引き絵馬

徳満寺は茨城県北相馬郡利根町布川にある。少年時代、布川に住んだ柳田國男はこの絵馬を見て大きなショックを受けたという。林玲子編『日本の近世 15 女性の近世』（中央公論社、1993 年）より



子返しの図

江戸時代。大阪人権博物館蔵。嬰兒の口をふさぎ、膝で腹部を圧迫して間引きを犯す女性が描かれる。その女性は地獄へ堕ち、殺した子供たちから責め苦を受けるだろうと間引きを戒めている。大阪人権博物館編『ゆれる生と死の境界』(1997年)より

pisando-o com os pés, e, mentindo, disse que tinha nascido nado-morto⁶⁹.

⁶⁹ Acerca deste mandamento estão patentes duas confissões relativas ao costume de «Couo nagasu» [子を流す] – «Botar a criança que não esta ainda bem coalhada no ventre» (*Vocabulario*, f.52) – ou de «Couo vorosu» [子を堕ろす] – «Botar a molher a criança fora de tempo matandoa, &c» (*Vocabulario*, f.283v) – como ao infanticídio levado a cabo logo após o parto. Ambos os actos, escusado dizer, são aqueles que violam o quinto mandamento de Moisés.

Aquando da primeira missão que São Francisco Xavier fez juntamente com o seu companheiro irmão João Fernandes em Yamaguchi, ele, por ainda não saber falar japonês, fez com que o seu colega dissesse «a vozes altas quão grande maldade cometião os japões, especialmente em tres couzas». Segundo nos informa o padre Luís Fróis na sua *Historia de Japam*, a terceira maldade que os japoneses cometiam era «que as mulheres matavão os filhos quando parião, pelos

não criar; ou tomavam mezinhas para mover, o qual era grandissima crueza e deshumanidade» (Luís Fróis, *Historia de Japam*, I, José Wicki ed., Biblioteca Nacional de Lisboa, 1976, p.32. Ruisu Furoisu [ルイス・フロイス], *Nihonshi* [『日本史』], VI, tras. Matsuda Kiichi [松田毅一] & Kawasaki Momota [川崎桃太], Chūōkōronsha [中央公論社], 1978, p.55).

A missiva datada a 1 de Dezembro de 1560 redigida pelo padre Gonçalo Fernandes destinada a um irmão do colégio jesuíta em Coimbra informa-nos que «Tem os Gentios por costume em tempo de fome, se hũa mulher pare, tomão o filho, & leuamno à praya, & poemlhe hũa pedra em cima, que venha a marê & o leue: & dão por rezão, que pera que haõ de criar a quem não tem que lhe dar de comer» (*Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa, des do anno de 1549 até o de 1580*, primeiro tomo, edição fac-similada da edição de Évora, 1598, José Manuel Garcia ed., Castoliva Editora, Maia, 1997, f.72v. Matsuda Kiichi [松田毅一] coord., *Jūroku-shichi Seiki Iezusukai Nihon Hōkokushū* [『十六・七世紀イエズス会日本報告集』], Daisanki (Terceiro período), I, Dōbōsha [同朋舎], 1997, p.330).

O padre Luís Fróis deixou-nos as seguintes duas descrições relativas tanto ao aborto como ao infanticídio no seu Tratado acerca da diferença cultural Europa-Japão (Luis Frois S.J., *Kulturgegensätze Europa-Japan (1585). Tratado em que se contem muito susinta e abreviadamente algumas contradições e diferenças de costumes antre a gente de Europa e esta provincia de Japão*, ed. Josef Franz Shütte S.J. Tōkyō, Sophia Universität, 1955):

«Em Europa, posto que o aja, não é frequente o aborsio das crianças; | em Japão he tão comum que ha mulher que aborta vinte vezes» (Capítulo 2º-38).

«Em Europa, depois da criança nacer, raras vezes ou quasi nunca se mata; | as japoas lhe poem o pe no pescoso e matam todos os que lhe parese que não podem sustentar» (Capítulo 2º-39).

O Padre Visitador Alessandro Valignano deixou-nos a seguinte descrição no seu *Sumario de las cosas que perteneçen a la Provincia de la Yndia Oriental y al gobierno della, compuesto por el Padre Alexandro Valignano Visitador della, y dirigido a nuestro Padre General Everardo Mercuriano en el año de 1579*: «y no hazen mas caso de matar un hombre que a un animal, de manera que no solo por cosas pocas, mas aun solo por ver como corta su espada matan un hombre, y como cada uno puede matar en su casa y las guerras son tan continuas que parece que la mayor parte dellos muere a espada, y llegan a tanta crueldad que las propias madres muy comūmente en pariendo el hijo le ponen el pie en el pescueço y lo matan por solo dezir que no los puede sustentar, y aun muchos matan a si mesmos cortandose las tripas con su puñal» (*Documentação para a História das Missões do Padroado Português do Oriente*, XII (1572-1582), ed. António da Silva

Rego, Lisboa, Fundação Oriente / Comissão Nacional para as Comemorações dos Descobrimentos Portugueses. Edição facsimilada da edição de 1958, pp.526-527. Varinyāno, *Higashi-Indo Junsatsuki* [『東インド巡察記』], tra. Takahashi Hirofumi [高橋裕史], Heibonsha [平凡社], Tōyō Bunko [東洋文庫], 2005, p.171).

Um exemplo dos esforços feitos pelos missionários jesuítas no sentido de que as japonesas abandonassem o sobredito ruim costume pode ser confirmado na missiva datada a 8 de Outubro de 1561 que o padre João Fernandes escreveu em Bungo [豊後] aos irmãos jesuítas, na qual carta João Fernandes informa-nos que os cristãos em Bungo apreciaram umas peças de tema bíblico e escreve: «Depois disto representáráo aquellas duas mulheres que pedirão a justiça a Salamão: a qual representação foi boa pera confusão das mulheres gentias que nesta terra matão seus filhos, mostrãdolhes a força do amor natural que tem a mãy aos filho, & assi outros muitos passos da sagrada escritura» (*Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Iesus escreuerão dos Reynos de Iapão & China aos da mesma Companhia da India, & Europa, des do anno de 1549 até o de 1580*, primeiro tomo, edição fac-similada da edição de Évora, 1598, José Manuel Garcia ed., Castoliva Editora, Maia, 1997, f.79. Matsuda Kiichi [松田毅一] coord., *Jūroku Shichi Seiki Iezusukai Nihon Hōkokushū* [『十六・七世紀イエズス会日本報告集』], Daisanki (Terceiro período), I, Dōbōsha [同朋舎], 1997, p.355).

Vê-se no Primeiro Livro dos Reis 3:16-28 o famoso episódio de terem as duas mulheres pedido a Salomão para fazer justiça. Resumindo-o: Duas prostitutas deram à luz filhos respectivamente. O filho de uma delas morreu, abafado por ela, que dormia sobre ele. A mesma, em plena noite, de modo dissimulado, trocou o bebé moribundo pelo da outra mulher deitando-o ao seu lado, passando o seu filho, já morto, para junto dela. Quando amanheceu, começou uma disputa entre ambas que afirmaram pertencer a si própria o que estava vivo, pelo que as duas mulheres pediram a Salomão que fizesse justiça. O rei ordenou então que lhe trouxessem uma espada, dizendo que cortassem o menino vivo em dois e desse a cada uma a sua metade. Então a mãe, a quem pertencia o filho vivo, ficando meio louca, implorou ao rei que não o matasse e o desse a ela, enquanto a culpada permaneceu indiferente. Então o rei ordenou que o menino fosse devolvido à sua verdadeira mãe.

Crê-se que foi no decorrer do período Yedo [江戸時代] (1600-1868), principalmente a partir da segunda metade do século XVIII, que o costume do aborto e do infanticídio se transformou num acto comum (cf. o verbete «Mabiki» [間引] da autoria de Marui Kazuko [丸井佳寿子] in *Kokushi Daijiten* [『国史大辞典』], XIII, Yoshikawa Kōbunkan [吉川弘文館], 1992). Vê-se, por exemplo, o trecho no livro intitulado *Kinxei Kijinden* [『近世畸人伝』] da autoria de Ban Cōkei [伴蒿蹊]

publicado em 1790: «Finnin co amata aru monoua, nochini sanxeru couo corosu» [貧人子あまたあるものは、後に産せる子をころす] (Os casais pobres que já têm muitas crianças matam aquelas que nascem posteriormente). Nixicaua Ioken [西川如見] comenta no livro intitulado *Fiacuxô Bucuro* [『百姓囊』] publicado em 1727: «Couo xighecu sansuru mono, fajime fitori futari sodaxi nureba, suyeua mina fabucu to iyte, corosu coto vôxi, cotoni nhoxiua vôcata corosu narauaxino mura satomo ari» [子を繁く産する者、初め一二人育しぬれば、末はみな省くといひて、殺す事多し、殊に女子は大かた殺すならわしの村里もあり] (Aqueles que dão à luz crianças com frequência, acabando de criar satisfatoriamente a primeira e a segunda, matam muitas vezes aquelas que nascem posteriormente, dizendo «omiti-las». Há umas povoações onde se tem por costume matar a maioria das meninas). Satô Nobufiro [佐藤信淵] informa-nos na sua obra *Keizai Yôrocu* [『経済要録』] publicada em 1827 que: «Imano yoni atarite, Mutçu, Deuano riôcocu bacari nitemo, acagouo insatçu suru coto, nen nen rocu, xichiman nin uo cudarazu» [今の世に当て、陸奥・出羽の両国ばかりにても、赤子を陰殺すること、年々六、七万人を下らず] (Neste período em que vivemos, só nos reinos de Mutçu e Deua – em quase toda a região nordeste da ilha Honshū – o número dos bebés que são mortos de maneira clandestina cada ano não é inferior aos sessenta mil ou setenta mil).

O crescimento da população do japonesa manteve-se quase estagnado durante todo o século XVIII após o aumento dramático que tinha conhecido no século anterior. A principal razão da estagnação populacional ocorrida em Setecentos, segundo a opinião geralmente aceite até recentemente, residia no enfraquecimento das comunidades rurais e na tirania dos dáimios feudais. A estes motivos adiciona-se a relativa frequência de maus anos agrícolas devido ao arrefecimento climático e às consequentes epidemias daí derivadas, conjuntura essa que contribuiu bastante para que se acentuasse de forma dramática este costume. Uma nova abordagem dos dados demográficos, porém, tem possibilitado uma outra análise a partir de uma óptica diferente, no que concerne ao costume do «Mabiki». Quer dizer: quer quanto ao aborto, quer quanto ao infanticídio, cada lavrador japonês optaria praticá-los com determinados objectivos em mente, os quais poderiam variar desde o equilíbrio do número de filhos e filhas de forma a dividi-los harmoniosamente entre actividades domésticas e extra-domésticas; de deixar um certo intervalo entre um parto e outro; de manter um balanço adequado entre a competência administrativa e a escala de família, etc (cf. o verbete «Jinkō mondai» [人口問題] da autoria de Kitō Hiroshi [鬼頭宏] in *Kokushi Daijiten* [『国史大辞典』], VII, Yoshikawa Kōbunkan [吉川弘文館], 1986). Deste modo o Japão setecentista, de facto, contornou uma hipotética explosão demográfica, tendo conseguido, como resultado, concretizar uma sociedade isenta, falando de um modo geral, de frequentes fomes, mas é de

acrescentar que isso se tornou possível através dos meios acima indicados.

A observação já citada do padre Luís Fróis acerca do facto de os japoneses terem tido poucos remorsos para com o aborto pode ser evidentemente aplicável à sociedade japonesa posterior e ainda hoje se mantém vigente. É de notar que tal costume ruim e desumano é descrito de forma despreocupada em várias obras “profanas” do «Xenriū» (Senryū). Dentro das obras representando os episódios relativos ao aborto e contidas no capítulo intitulado “Onna-isha” [女医者] do interessante livro *Edo no machi-isha* [『江戸の町医者』] (Shinchō Sensho [新潮選書], 1997) da autoria de Ono Masataka [小野真孝], cabe-me citar apenas duas: «Chiūgiōye itçutçuki voite vonaji cauo» (Chūjō ye itsutsuki oite onaji kao) [仲条へ五ヶ月置いて同じ顔] (*Faifū yanaghidaru*). Tradução livre portuguesa: Aparece a mesma cara à porta do médico à “Chiūgiō” após o intervalo de cinco meses; «Chiūgiōye rogi cara curuva xi go caime» (Chūjō ye roji kara kuru wa shi go kaime) [仲条へろじから来るハ四五会目] (*Xenriū fiō mancu auaxe cachicu zuri*). Tradução livre portuguesa: Já tem abortado quatro ou cinco vezes aquela que vem ao medico à “Chiūgiō” sem ficar perdida por via do beco das traseiras, não pela entrada principal. Uma nota adicional: “Chiūgiō” é a designação sinónima dos médicos clandestinos especializados em aborto.